

聖書: 第一列王記8章41～53節

説教: あなたに立ち返るなら

はじめに

ソロモンはイスラエルの三代目の王の座に着いたとき、父ダビデもなしえなかった神殿建設に取りかかり、七年かけて完成させます。神殿の完成をお祝いするために、国中から主だった人たちが招待され、厳かに完成記念式典が始まりました。まず、祭司とレビ人たちの手によって、これまで会見の天幕に置かれていた契約の箱が運び出されます。かつて、父ダビデは契約の箱を運ぶことについて大きな失敗をしたことがあります。神が語っていた方法を守らず、自分勝手な方法で契約の箱を運ぼうとした。そのために神の怒りが下し、大切な部下を失うという苦い経験をしていました。

ソロモンもこのことは知っていますから、慎重です。契約の箱の前で、羊や牛がいけにえとしてほふられ、それからようやく神殿の最も奥にある至聖所と呼ばれるところに箱が無事に安置されました。ほっとした瞬間です。そのとき思いがけないことが起こりました。神殿の中から雲がわき起こり、祭司たちは視界を遮られ立っていることさえできなくなります。これを見たソロモンは、思わず「主は、暗闇の中に住む」と叫び、集まった人たちの方を向いて祈ります。彼は全部で七つの祈りをささげるのですが、先週はそのうちの前半の四つを見て参りました。今日は後半の三つの祈りを見て参ります。

1 ソロモンの祈り

1) 遠方の地から来る外国人

ソロモンの五つ目の祈りは41節から始まります。最初の所だけを読みます。「また、あなたの民イスラエルの者でない外国人についても、彼があなたの御名のゆえに、遠方の地から来て祈るとき。」

そもそも、ソロモンはどん動機で神殿を建てたのか、その原点をもう一度確認しておきます。5章5節で、ソロモン自身が隣の国の王であるヒラムに語っていることが参考になります。「今、私は、私の神、主の名のために宮を建てようと思っています。主

がわたしの父ダビデに、『わたしが、あなたの代わりに、あなたの王座に着かせるあなたの子、彼がわたしの名のために宮を建てる』と言われたとおりです。」

ソロモンは、ここで「私の神」と言っております。イスラエルの神ということでもあります。彼はイスラエルの神が住まう宮を建てました。それなのにソロモンは何を祈っているか。不思議なことですが、イスラエルではない人たち、彼らがもしこの宮に来て祈ったならば、その願うとことをすべてかなえてくださいと、言っています。

これが日本ならばどうだろうか。たとえば北海道神宮です。調べてみるとあそこには四つの神がまつられていて、そのうち三人（柱）は、北海道という土地あるいは日本という土地を守る神で、四人（柱）目は明治天皇だそうです。神宮に行くと、いまは観光バスが乗り付けて、たくさんの外国人が訪れています。ところがあそこには、外国人のためではなく、あくまでも北海道という土地、日本という土地のための神々がまつられているのです。

そういう点で、イスラエルの神殿は非常に特殊です。外国人であっても、信仰さえあればイスラエルの神は何の差別もなく扱ってくださるのだと語っています。だから私たちはイスラエル人ではなくても、遠慮なくソロモンが信じていた神を礼拝することができるわけです。

2) 戦いに臨むとき

六番目の祈りは44節です。「あなたの民が、敵に立ち向かい、あなたが使わされる道に出て戦いに臨むとき、あなたの選ばれた町、私が御名のために建てた宮の方向に向かって主に祈るなら。」今度は、戦場で戦う兵士のための祈りです。当然、宮に来て祈ることはできません。その代わりに「宮の方向に向かって祈るなら」それで十分であると言っています。私たちは今、戦場で戦うことはありませんから、この六番目の祈りは関係ないように思うかもしれません。

3) 捕虜になったとき

最後の七番目の祈りは46節です。「彼らがあなたに対して罪を犯したため、一罪を犯さない人間はひとりもないのですから—あなたが彼らに対して怒られ、彼らを敵に渡し、彼らが、遠い、あるいは近い敵国に捕虜として捕らわれていった場合。」

先ほどの六番目の祈りもそうでしたが、まして捕虜になる話となるとますます、今の私たちには関係がない。そう思うかもしれません。

2 祈り

1) 捕らわれた地に住む外国人

からだのどこにも痛みがなければ、多くの人は自分は健康だと疑いません。ところが、そんな人が健康診断を受けてたまたま重大な病気が見つかり、驚くことがあります。「自覚症状がないのは健康な証拠」ではないことが、これでわかります。

同じように罪の意識がないから平和だと言うことにはならない。自覚症状がなくても神の目で健康診断をすれば、全員もれなく罪という病名が下ります。なにしろ46節に書いてある。「罪を犯さない人間はひとりもない。」

そう言われても多くの方は大変なことだと思わない。何を大げさなと笑われてしまう。ところが、あるとき気がつくわけです。重い病気が見つかった。職場で取り返しのつかない問題を起こしてしまった。家族との関係が壊れてしまった。災害で全部失ってしまった。なんとか元に戻したいと願っても、どうすることもできない。その時初めて、自分は罪という奴隷になっていたのだ。罪という国の捕虜になっていて、そこから逃れることができない、と悲しむことになります。皆さんはそういう所を通過して教会にやってきたわけです。

2) 反省して悔い改める

どうしたらよいのでしょうか。ソロモンはこう言っています。47節。「彼が捕らわれていった地で、自ら反省して悔い改め、捕らわれてい言った地で、あなたに願い、『私たちは罪を犯しました。悪を行って、咎ある者となりました』と言って。」

神社のホームページを見ると、お参りをして願い事をするときは、まず手を洗ってからだを清め、

口をすすぐという作法があるのだそうです。罪の告白については、なにも書かれていませんでした。

イスラエルの神はどうなのでしょう。からだを洗えとは言わない。ソロモンは、「捕らわれていった地で」と何度も繰り返している。今あなたがいるその場所だと言っている。罪のあるそのままの場所でもよい。ただしすることが一つだけある。「私たちは罪を犯しました。悪を行って、咎ある者となりました」と告白しなさい。神社の神と全然違います。

3) 心を尽くして、精神を尽くして、あなたに立ち返るなら

でも世の中にはいろいろな人がいるわけです。たとえば、盗みをして警察に捕まったとする。なかにはこう言う人がいます。「もうしませんから、勘弁してください。」釈放されると「うまくだましてやった」と舌を出す。そういう人もいます。全然心から反省していない。口先だけです。

そこでソロモンは言うのです。48節。「捕らわれていった敵国で、心を尽くし、精神を尽くして、あなたに立ち返り、あなたが彼らの先祖に与えられた彼らの地、あなたが選ばれたこの町、私が御名のために建てたこの宮の方に向いて、あなたに祈るなら。」口先だけではなんの意味もない。「心を尽くし、精神を尽くして」罪の告白をしなさい。でも、いったいどうすればいいのでしょうか。

4) ソロモンはどうしたのか

ソロモンはどうしたのでしょうか。自分の口で語ったのですから、当然彼自身率先して「心を尽くし、精神を尽くし」て罪を告白し続けたと思うでしょう。彼は神から知恵を与えられた人でしたから、なおさらそうしたに違いない、と思う。ところが、この後ソロモンはじょじょに道はずれていくのです。彼は七百人の妻を迎えたそうなのですが、妻たちが信じていた別の神々に心が引き寄せられていってしまうのです。もちろん、神はそれを見て何度も警告しました。けれどもソロモンは改めない。そのまま地上の生涯を終えます。死んで終わりではない。ソロモンの罪はやがてイスラエルに深刻な影響を及ぼすのです。国が南と北に分裂してしまう、

それを機会に敵に攻められ、結局国は滅んでしまふ。人々は殺され、生き残った者は捕らえられ、外国に強制移住させられる。そんなことが起きていく。皮肉なことですがソロモンが祈ったとおりに捕虜となつてつらいところを通ることになるのです。

3 立ち返るとき

1) 捕虜となつて初めて罪を自覚する

神の知恵をいただいたソロモンでさえ、このありさまで。だったらなおさら私たちができるはずがありません。どうすればいいのでしょうか。

信仰に近道はありません。結局、痛い目に遭うしかないのだと思います。自分がいかに罪人であるのか、聖書を読み、少し勉強をすれば頭で理解することはできます。それで分かつたつもりでいます。でも本当に分かつていないのです。実際に痛い目にあつて初めてわかる。私たちは罪という敵と戦いながら、勝つことができずに敗北の連続なのです。そうやって敵に捕らわれ、捕虜となり、無理矢理に外国の地に送られ、そこで奴隷となつて初めて目が覚める。ああ、本当に自分は神に罪を犯した。そうしたらどうなりますか。心の底から嘆き悲しむことになる。実はその時、私たちはしているのです。心を尽くし、精神と尽くして神に立ち返る。これは、努力でするものではない。追い込まれたとき、言われなくてもそうします。

2) 神に祈る

普通の人は嘆き悲しんで終わりでしょう。しかし私たちは違う。ソロモンは言いました。「**あなたが選ばれたこの町、私が御名のために建てたこの宮のほうに向いて、あなたに祈るなら。**」

捕虜なつて何もできなくなつても、あなたは祈ることができる。どこに向かつて祈るのか。ソロモンの時代は建物に向かつてでした。しかし今は違います。ソロモンの神殿は崩されましたが、死からよみがえり崩されることのない本当の神殿となつてくださったイエス・キリストに向かつて祈ることができる。

祈つたら何が起こるのでしょう。49節。「**あなたの御すまいの所である天で、彼らの祈りと願いを聞き、**

かられの言い分を聞き入れ、あなたに対して罪を犯したあなたの民を赦し、あなたにそむいて犯したすべてのそむきの罪を赦し、彼らを捕らえていった者たちが、あわれみのこころを起こし、彼らをあわれむようにしてください。」

神は聞いてくださる。聞いて、罪を赦してくださるばかりでなく、あなたを捕らえていた人たちの心に神が働きかけ、不思議なかたちで解放されていくのだ。そのようにして救われていくのだと約束します。

神殿が完成してからわずか30年後にイスラエルは南と北に分かれ、やがて人々はアッシリヤとか新バビロニアに捕らえ移されていくことになります。こんなすばらしい祈りをしたソロモンでさえそうなつた。

しかしよくみると、神はそんなソロモンの口を通して、救いの道を現してくださっていた。どこまでも罪人を救おうとされる神の不思議な助けを覚えます。